

寧ろ、欧米や日本などに比し、勝ることも劣らぬ水準だったことも、私には嬉しい驚きだった。 公用語はスワヒリ語との話だが、これとは別に数多くの部族の数多くの言葉があるのは他の途上国と同じである。面白かったのは、ケニア人同士が英語で話している場面に出くわしたことである。聞いてみると、二人は出身部族が異なり、このような際は英語が一番便利ということがよくあるとの説明だった。 しかし、なんとと言っても、ケニアと言えばサファリである（サファリとは、動物を求めてサバンナを移動することを意味する）。 マサイ・マラに着いてすぐ、ランド・クルーザーに乗って三時間、東京と同じ広さというサバンナを走りまわった。 手を出せば届きそうな距離から見た動物はライオンの一家四匹、母親と二匹の子供のチータ、キリンの親子、雄一匹が三十四程度の雌の面倒をみているように見えた	インバラ、ここかしこに縞馬の集団、アフリカ象の三十頭程度の群、いかにも猛猛そうなバッファローの一群。マサイ川には、三十頭くらい河馬が見え隠れしていた……。 翌朝、夜明けとともに舞い上がった熱気球に乗って、空から、ゆらりゆらりとサバンナを見物（ハルーン・サファリ）。着地した場所で、地上のメンバーが用意したシヤンベンで乾杯し、その場で調理された朝食に舌づつみ（シヤンベン・ブラックファースト）。 まさに他の地域では経験出来ない、素晴らしいものであった。 東アフリカの工業国といったも、主たる産物が国際価格の変動が激しい一次産品であるケニアにとつて、サファリのような観光事業は重要な外貨獲得の手段である。そのような状況の下、観光開発と自然保護のバランスはケニアにとっても重要なテーマのようである。実は私の今回の視察の目的の一つに、「ムバタ・ロッジ」と	いう、当社が販売斡旋をしたロッジの建設の進み具合を確認するとともに、このような事業が、自然や動物に悪影響をもたらすことがないかどうかを確認したいということがあった。 短時間の見聞で結論を出すことに問題があることを承知で感想を言えば、勿論サバンナをクルーザーが走らない方が良いに決まっているし、動物の上を時々すさまじいガスの音を出して飛ぶバルーンは飛ばない方が良いに決まっている。しかし、いろいろな工夫をしながら、ケニアを理解してくれる外国人を増やし、彼等の使う外貨が国の発展に貢献する道があるならば、「秩序ある開発」はありうるはずだし、現在行われていることは十二分に許される範囲だと思われる。またわが国など先進国が援助をする際にも、単に資金だけではなく、近代化に伴う問題の克服に役立つノウハウを併せて伝える必要があるだろうとも思った。	視察のもう一つの目的は、わが友、ケニアダイナースとの親交を深めることだったが、彼らは「当地一番のカード」ということで、誠に元気で、出会いはとても楽しいものだった。多くのタクシーをはじめ、いろいろな場所にステッカーが貼ってあった。 帰国してから知ったことだったが、三月九日付のナイロビの日報新聞に、私とカッサム・ケニアダイナース会長が握手している大きな写真が掲載されたという、およそ日本では考えられない愉快なオマケまで付いて来た。
	aの謎 中嶋嶺雄 （東京外国語大学教授） 昨秋、英国「サンデー・タイムズ」は二十世紀をつくった一〇〇〇人の中に鈴木鎮一氏を選んだ。その鈴木先生に師事する機会を得て、子供の頃からヴァイオリンに		

親しんできたとはいえ、私にとってヴァイオリンは、所詮、素人の趣味である。しかしプロの演奏家と合奏させていただく機会などがあると、自分の腕前のことは棚に上げて、もっと良い楽器があればもっとうまく弾けるかもしれない、とつい思ってしまうことがある。

私がこれまで使っていたのは、学生時代買ったドイツ製の大衆的な楽器で、かなり弾き込んでいるから低音はよく鳴るものの、E線の高音がつぶれるなど音質に限界があり、人に話せるような楽器ではなかった。数年前のサントリイ・ホルルのオーブニングに余興で弾かせていただいた折、私のあとで本格派の演奏をされた江藤俊哉氏に「楽器は何ですか」と楽屋で聞かれたことがあったけれど、つい口を濁してしまった。

だから、もう少し良い楽器が欲しい、というのが私のここ数年来の夢であり、こうして、私のヴァイオリン探しが始まった。もとより、何千万円もする名器を買う必

要も努力もないけれど、ある程度のレベルの楽器を手に入れようと、国際会議などでバリやウィーンに行ったときには、足しげくヴァイオリン専門店に通ったものである。家族のためにヴィオラや弓

せがあるようになり、通算すれば二十本近いヴァイオリンをあずかつては「試奏」してみたが、なかなか決断がつかなかった。あるイタリアの程度度の楽器などは、都内の専門店を何軒もまわって鑑定

楯円の花火

大西民子

還りくるパーセンテージ聞きをればいよ華やぐ鮭の稚魚らは六階の窓に見おろす水のうへ色をうすめて春の雨降る
外つ国の人の肩幅まぎれなく托鉢の僧にまじりて行けり
いづこにも出でて行かねば意識する日も無くてわれは黄色人種
信号に停車しをれば正面に楯円にひらく遠花火見ゆ
闇の夜のカーブミラーを一瞬间によりぎりゆきたり白の毛のもの
欲しきものそろひてしまふ店ならむ白く光れる砂も売りあて
水たまりをよけつつ歩み来し道に供へられたる白菊に会ふ

を買ったウィーンのゲルハルト・ノイバウアーなどは、こうして知った店である。

私がヴァイオリンを探していることが伝わったのであろうが、国内でも個人や楽器商から問い合わせ

してもらうと、本物だと折紙をつけてくれた店がある一方、マンシヨンの一室で解体したり修理したりしている製作者は、見た途端に贋物だといって、ラベルなどはどうにでも偽造したり貼り替えられ

ることを実地に教えてくれた。
こうなると、結局、自分の手持ちのヴァイオリンと弾き比べてみて、大きな良い音が出るものを、値段を勘案して決める以外にないのだが、ここまでくる間には、サザビーズのオークション用カタログを取り寄せて研究したり、英文のヴァイオリン辞典 (Universal Dictionary of Violin and Bow Makers) で調べたり、巧みに補修したヒビ割れを見つけたりと、いうことになってしまった。

その私がついに決断して買ったのは昨秋のことである。それもフランスのヴァイオリンとしては知る人ぞ知る J・B・ウィヨーム (Jean Baptiste Vuillaume, 1798-1875) の一八六九年物である。
ウィヨームは、ストラディヴァリやグァルネリなどイタリアのクレモナの名器のイミテーション作者として知られ、バガニーニが「カノン」の名をもつグァルネリの修理を頼んだところ、早速その模造品を作った来て、さすがのバガニー

ニにも全く区別がつかなかったという逸話の持ち主でもある。晩年は、これらの名器を模写しつくした上で彼自身の作品をつくり、評価を得たというが、ヴァイオリンの名器に十九世紀のものが少ないのは、ヴィヨームが十八世紀の名器をあまりにも巧みに次々とコピーしたからだともいわれている。

私の入手したヴィヨームもニスの仕上げが本当に美しく、品格もあるけれど、私が決断したのには、もう一つ密かな理由があった。この楽器には、都合、三枚の鑑定書があり、そのうちのひとつは、ニューヨークの有名な楽器商

だったルドルフ・ミューリッツァーのものであるが、そこには、一九三九年十一月二十七日の日付で、このヴァイオリンの所有者はニューヨーク・ジャージー州ニューワークに住むI・a・スターン (Stearn) となっている。

入手先の東京の楽器商は、この鑑定書の記載内容に気づいていなかったが、先の英文ヴァイオリン

辞典には、ヴィヨームのヴァイオリンはアメリカで評判がよかったと書かれている。だとすれば、この鑑定書にいうスターンは、もしかすると世紀のヴァイオリニスト、アイザック・スターンのことではないか。私自身、スターンの演奏を愛好しており、もう二十年も前になるけれど、ピアノのイストミン、チェロのローズと組んだ名トリオを私はロンドンで二回も聴いた想い出もある。

一九二〇年にウクライナの田舎町クレメネツにスラブ系ユダヤ人として生まれたスターンは、一歳のとき両親とともにサンフランシスコに移住し、十五歳で、私もよく弾くバッハの「二つのヴァイオリンのための協奏曲」でデビューした。三七年にはニューヨークのタウン・ホールで演奏、次いで四年にはカーネギー・ホールで大成功を収めている。となると、私のヴァイオリンは、ニューヨークで活躍しはじめた頃のスターンに手頃な程度のもので、やはり

スターンが使ったものかもしれない。先の鑑定書のみドル・ネームのaはスターンのものなのかどうか。レコードのカタログやスターンについて書かれた書物、また音楽辞典や人名辞典を当たれるかぎり調べてみたのだが、どこを見てもアイザック・スターン (Isaac Stern) とだけなっていて、みドル・ネームは載っていない。アイザックというファースト・ネームの同じユダヤ人としては、トロツキ

ー評伝で有名なアイザック・ドイッチャーがいたけれど、スターンにはみドル・ネームがないこともあり得よう。そんなとき、わが家にホーム・ステイしていたエル大学出の女性にこのことを話すと、なんと彼女はスターンの息子の級友を知っているというではないか。だったら彼女に確かめてもらおうかと思ったのだが、この「aの謎」は永遠に解けない方がよいのかとも思

い直して、そのままにしている。私が最近出したエッセイ集『リヴォフのオペラ座』(文藝春秋)では、「わが家には弦楽器も何丁もあるけれど、とくに名器があるわけではないので、なんとか儉約してもっと良いヴァイオリンを手に入れたい」と書いたばかりであった。私が表題にしたリヴォフは、アイザック・スターンの生地にもごく近いポーランド国境寄りのウクライナの美しい古都であるという偶然も重なっているのだ、今回ようやく入手したヴィヨームのヴァイオリンを、私は生涯愛用したいと思っている。

マコからの手紙

垣井道弘

(映画評論家)

マコから手紙が届いた。

困ったことに僕はめったに手紙を書かないくせに、人から貰うのはとても嬉しい。マコの手紙は、「永い間、日本語で手紙を書いて

散されながら今も全海洋に存在していることがイカ肝臓から分かっている。銀一〇Mは二百五十日の半減期で急速に減衰するため、チェルノブイリ事故で一旦急上昇したものの、今では容易に検出できないまでに減衰している。核実験由来の銀一〇Mの半減期は百二十七年と長いので、今もコバルト六〇と同程度にイカ肝臓から見出せる。ただし、南半球の隅々まではまだ拡がっていないようである。核実験が、主に北半球で行なわれたからである。

またイカ肉には油は一パーセントしかないのに対し、イカ肝臓には三〇パーセントの油がある。そのため油に溶けやすい有機塩素化合物(PCB・DDT・ダイオキシン)、有機スズ化合物(TBT・TPT)が肝臓に溜まりやすい。

PCBやTBT・TPTは日本近海のイカ肝臓からは検出されるが、ニュージーランドやペルー沖では見られない。放射性核種やPCBなどはおそらく海水中濃度の

数十万倍イカ肝臓に濃縮されている。これらは明らかに人間活動に起因する物質であり、海域ごとの異なる数値は汚染の多寡を示すものである。でもなぜ、イカは必須でもない

をつくってきたようだが、最も重い九十二番のウランもイカ肝臓に多く、分らないことが無数にある。塩辛くらいでしか付き合ひのないイカ肝臓であるが、海の汚染に

句帖から

藤岡筑邨

人間に呆れた貌の海鼠かな
鳥雲に瓶詰めの水買ひに出て
しゃぼん玉わつと歓喜が噴き出せり
春浅し去年の落葉に日があたり
下町の路地の一戸の春炬燵
草餅やふるさとの丘はるかなる
四月馬鹿閻魔大王古りたまひ
さくら餅提げてひらりと女去る

元素を肝臓に高度に濃縮するのか。ひとつ考えられるのは、性質の似た元素が体内で似た行動をするためである。それにしても、生物は長い歴史の中で、原子番号の小さい元素から利用をはじめて体

について多くの情報を秘めている。その解説にはもっとイカの生活を知らねばならない。イカの生態をもっと知ることによって、海の汚染地図が描ける日もそう遠くない。

百歳のゴルフ

中澤真二
(無職)

私は今年百歳になるが、いまだに週に一度、一ラウンドずつゴルフをしている。

私は郷里山梨の日川中学から一高に明治四十三年に入った。一高は全寮制で一年生は全員入寮、私は東寮十三号の狭い七人部屋で後に文藝春秋社を創めた菊池寛君と同室で、三階屋根裏の一行に夜具を列べる寢室では直ぐ隣に枕を列べて一年間を過した。

大学の電気工学科を出て、大正六年東京電燈会社へ入った。当時は電力の開発期でモーターの便利が認められ、電灯は一軒に一、二灯位であったが、入社して一、二年後には百万灯に達し大祝と昇給が一年二回あった。私は在職二十五年のうち二十二年間の大半は水力、火力発電所を電気の主任とし